「日本の伝統色」　山口県景観アドバイザー　棟久　りか

私達は、色を測って管理したり人に伝えるために、マンセルシステムの色相記号、明度の尺度値、彩度の尺度値を連記し、その色を表示しています。

例えば、赤の色相の中で最も赤らしい鮮やかな赤を表す場合、5R5/14 と表示します。

やや明度が低いようであれば５を４・５に変えたりして、十進法により全ての色を数値化することで、色を伝えています。

ただ、日常の会話には、数字で色を話すなんてことはまずありません。
多少個人によって色の幅があるものの、皆が共通のイメージが湧く色を表すのに、昔から、その固有の色名を用いてきました。
水色、空色、桃色などといったような固有色名です。
それは海外でも同様です。

日本に伝わる伝統色は慣用的に使うものもありますが、時代の変化とともにその色名を聞いても、どんな色なのか想像できないといった色名も多々あるようです。

日本の色名の多くは植物からとられたものが多く、特に四季の自然を豊かに表現した美しい色名が数多くあります。

春　…　萌黄　菜の花　若緑　山吹　紅梅　柳葉
夏　…　若苗　撫子　菖蒲　杜若　牡丹
秋　…　紅葉　紫苑　桔梗　葡萄　栗
冬　…　枯野　雪白　朽葉など‥

現在のように色見本がなかった時代、藍染などは、藍瓶に入れる回数で、瓶覗、水浅葱、浅葱、煮浅葱、浅藍・・・など、染織人の感と染色技術上から生まれた色名もあります。

時代によって自然同化の思想により古人たちの花鳥風月への感性は、日本人の美意識の高さに感銘を受けます。
十二単や能衣装の柄や、色、配色は今でも日本の伝統美を象徴させています。

また、江戸時代身近な染料で庶民の間で流行した「四十八茶百鼠」には、わずかに違う色のなかに「しゃれ」を感じ楽しみ、歌舞伎の人気役者の名がつけられた路考茶、璃寛茶、団十郎茶など庶民の色として定着していました。

手間をかけて自然から色を取り出していた日本の文化と自然のうつろいと命を感じ、生活に培ってきた日本人の感性の繊細さ。
環境色彩に携わるものとして、ただ色見本から色を見つけるのではなく、伝統色から伺える先人たちの色に対する思い、日本人が古くから磨いてきた感性の豊かさと節度を胸において、色彩を通した景観づくりに取り組みたいと思っています。